京大東アジアセンターニュースレター　第313号

（旧・「京大上海センターニュースレター」）

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター　2010年4月19日

目次

○ 「中国経済研究会」のお知らせ
○ また来た地震――チベット高原の一隅にて
○ 読後雑感 ： 2010年 第6回
○ 【中国経済最新統計】（試行版）

「中国経済研究会」のお知らせ

2010年度第1回目（通算第8回目）の中国経済研究会は下記の要領で開催されますので、大勢のご参加を心待ちにしています。

記

時　間：　2010年4月20日(火)　16：30－18：00
場　所：　京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館3階第3教室
報告者：　森晶寿（京都大学地球環境学堂准教授）
テーマ：　「中国の気候変動政策・CDM政策と農村バイオガスCDM」

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第3火曜日に行います。2010年度における開催(予定)日は以下の通りです。
前期：　4月20日（火）、5月18日（火）、6月15日（火）、7月20日（火）
後期：　10月19日（火）、11月16日（火）、12月21日（火）、1月18日（火）

（この件に関するお問い合わせは劉徳強（liu@econ.kyoto-u.ac.jp）までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。）

また来た地震――チベット高原の一隅にて

青海在住日本語教師　阿部治平

4月18日4時、現在玉樹地震の犠牲者は1484、行方不明312、負傷者1万2088、うち重傷者1394人となりました。重傷者の1、2週間後のことを考えると死者は2000人前後にはなるでしょう。新聞テレビでは、玉樹州政府所在地の結古（ジェグ）鎮のことばかり報道されていますが、周辺村落や寺院にも死傷者があるものと思います。

犠牲はチベット人だけではありません。漢人・回人にも犠牲者が出ています。

17日午後6時、「青海新聞網」ネットニュースに、大きな炎を上げる火葬場面が出てきました。鳥葬場近くに遺体を千体近く運び、僧侶数百が読経するなか火葬が行われました。一方遺族の了承を得て土葬にするというニュースがあるので、現地の習慣と違うから少し心配しています。しかし、防疫衛生を考えるとやむをえない措置だと思います。

4月16日夜は、青海民族大学のチベット人学生は東校舎に集まって死者のために集団で「オンマニペメフム」という真言を3時間ほど唱えました。

また16日夜インターネットに書き込みがあり、「チベット人に安いテントを売ってやるぞ。100個ばかりある」とか「ざまあ見ろ（「話該」）。2008年に独立をやって、いま政府の援助をもらって恥ずかしくないか」「自業自得」というのがありました。14億もいればこんなバカが出るのは仕方ありません。

玉樹地震のあった 14 日朝、わたしはインターネットで知りました。西寧から震源地ジェグ鎮まで 820 キロあります。こちらでは体に感じる地震ではありませんでした。いま日本語科 4 年生が朝となく昼となく卒論の指導を受けに来ています。そのなかに玉樹出身のものがいなかったので不幸中の幸いとかまえていましたが、とんでもない誤解でした。

青海民族大学外語学院の 200 人のうちチベット族学生は半分、13 人が玉樹出身です。日本語科３年生の女子２人のうち、ツェレンジョマは母方のおじ一家５人全滅、もう１人ツォジラモは兄嫁とその子が圧死。英語科の女子学生の父母と妹が行方不明。この女子学生の場合、14 日の５時 39 分に第一回の 4.7 級（日本ではマグニチュードといっていますが）の地震が発生し、故郷ジェグから「地震があったけどみな無事だから安心して」との電話がありました。その後 7.1 級の激震があり、１時間のちに 6 級の余震がありました。この間に家がつぶれました。

また、2 年生 1 年生にも玉樹出身者がいます。さらにチベット学院には大量のチベット人学生がいます。父母きょうだいに犠牲がでたもの、そうでなくても近親者にきっと死傷者がいます。

――17 日になってテレビの中の映像が変わってきました。

地元のジェグ＝ゴンパ（結古寺）の崩れた様子がでました。この寺でも 65 人の僧侶がなくなりました。救援のテントがあちこちに建てられ、ケサル（町の中心）広場で炊き出ししている様子 、ゴリ＝チベット人が食べる大きなパンが大量に送られている様子（トラック 61 台分）、被災した人たちの中でも元気な人たちが物資の運搬を手伝っている様子、西寧に運ばれてきたけが人が手術も終わって安心している様子が登場しました。さらに、

１、地震２日目朝には市内病院から 122 人の医療部隊が玉樹に向かった。西寧だけでも病院はかなりあるし、蘭州や成都からも派遣されていると考えても かなりの医療部隊が現地に行ったことになる。

２．北京から救急車が送られてきて、西寧の空港に並べられている。玉樹空港からけが人が運ばれてきたら、すぐに西寧市内の病院に送られるようになった。

３．玉樹から送られてきたけが人に対応するため、西寧の各病院は 100～200 ベッドを空けた。

――以上は元西寧市小島基地日本語学校教師松尾美幸さんのテレビ情報です（小宅にはテレビがありません）。

ニュースからしか判断できませんが、発電機 60 数台や食料・水なども届きました。電話は通じるようになりました。電気も明日か明後日には通じるでしょう。

しかし、公式ニュースのようにものごとがきれいに運ぶとは思いません。現地では食物や防寒具が不足しているという知らせもあります。

黄南蔵族自治州の同仁（レゴン）県では村ごとにパンやツァンパを集めて、ロンウ＝ゴンパ（隆務寺）に送り、昨日、僧侶の代表が大量の救援物資とともに玉樹に向かいました。

そのロンウ＝ゴンパ付近では昨日朝４時ころ地震が起きるといううわさが広がり、みな広場で夜明けまで過ごしたといいます。同じように根拠のないうわさで、地震を恐れる人はわたしの大学付近にもいて布団を抱えていました。

わたしは「チベット高原は地震の巣である。大きな地震がいつどこで起きても不思議ではない。西寧も例外ではない」といったことがあります。それでこのたび学生がぼくの予言が当ったというので、困惑して、ふたたび教室で地震の予知は交通事故や火事の予知と同じくらい難しい、要するに予知はできないのだと説明しました。

かくいうわたしも日本と中国とでは建物の構造が違うので、地震発生時に日本流に机の下にもぐり込むとかしてようすを見てから避難したらいいのか、すぐにグラウンドに飛び出せばいいのか迷っています。まあ、飛び出すでしょうね。なにしろ高層ビルだって細い鉄筋を組み合わせて支柱を作っており、鉄骨を使ったものは数えるほどしかありません。

西寧で玉樹並みの地震が起きたら、老朽宿舎の 6 階に住むわたしの安否は気づかわないでください。皆さんとただちにお別れですから。

2002 年に民族師範学院で教えた学生がいま日本各地の大学院にいますが、彼らの同級生にも玉樹出身の者やそこで仕事をしているものがかなりいます。昨日、留学生らは大変心配して救援方法を電話で問い合わせて来ました。ぼくは 19 日月曜日、青海赤十字の副責任者ニマ（尼瑪）女史にあって対処の方法を相談するつもりです。彼女は玉樹の救援から西寧に帰ったばかりで声がつぶれています。

それにしても映像で見るジェグの変わり方はすさまじく民家の 90％が壊れました。わたしは４年前一度ジェグを訪れたことがあります。住宅地はもちろん記憶のある建物と広場ロータリーがめちゃめちゃです。

マグニチュード 7.1 といえば激震には違いないけれども、民家がぺしゃんこになって風景が一変しているのはほとんどの建物が耐震構造になっていないからだと思います。

伝統的なチベット人の家は外壁は煉瓦ないしは日干し煉瓦、内部は立派な板張りで柱で壁と屋根を支える構造（日本の民家と同じハンギングウォール）になっています。しかしわたしが見た限り、柱と柱の間に「すじかい」が入っていません。まして新しい煉瓦の平屋の中には 4 隅に鉄の棒を入れて煉瓦を積んで、壁で天

井を支える構造で支柱もない家が多いと思います。再建時には耐震構造にしてほしいと思います。
今回、中国政府の動きはすばらしく速く、青海省党書記強衛もすぐ対策を講じましたし中央政府副総理回良玉も 14 日のうちに現地入りしました。つづいて温家宝総理も入っています。青海各地の消防、武警も現地にすぐ向かいました。西寧空港を発着する飛行機もいつもと爆音が異なり輸送機のようです。その回数も多くなっています。
幸いだったのは去年できたばかりの玉樹飛行場がつぶれなかったこと、飛行場とジェグ鎮をむすぶ道路も当初通じないといわれましたが速やかに修復できたことです。
日本には対策が迅速だったのはチベット人地域だからという論評がありますが、わたしはそうではなく四川大震災時の教訓を生かしたからだと思います。なんでも民族問題に結びつけるのは日本のマスコミの悪いくせです。
玉樹震災の救援困難の第一は標高が富士山並み（3700 メートル）であって、低地出身の救助要員が高度障害を起こしやすいことです。酸素の用意が必要ですが、報道には酸素（「気素」（気の中が羊）の文字がなく、危ぶんでおりました。案の定、かなりの救助要員に高地障害が生まれています。各地からの救援はボランティアも入れて 1 万人以上になるそうですが、そのうち何割が働けるか（高地障害の深刻さは岩垂弘『青海チベットの旅』連合出版参照）。
第二はチベット語の問題です。玉樹蔵族自治州は青海の他の民族自治州がチベット語のアムド方言であるのと違いカム方言です。文字は同じチベット文字ですが、会話はアムド方言とカム方言ではまず通じません。このため、負傷者・病人と漢語の救助要員との会話がなりたたないことはもちろん、青海から動員されたチベット人要員でも意思疎通が図れない場合が多いと思います。
この点では、ジェグまで 100 キロの四川省カンゼ蔵族自治州の石渠（セルシェ）県のセルシェ＝ゴンパ（色須寺。標高 4000 メートル）の僧侶 500 人が救援物資とともにジェグに到着したのは非常に良い判断だったと思います。みなカム方言ですし高地障害もありませんから。この寺では残りの僧侶は救命祈願の読経をし、他方救援物資をトラックで運んでいるとのことです。
さきの学生ツェレンジョマとツォジラモは西寧のチベット病院、武警病院、青海省病院などに空輸された負傷者の通訳に当っています。漢語とカム方言、アムド方言のわかるものは多くないので彼女たちは自分の身内の不幸を悲しんでいる暇がありません。活動費を申し込んで来たので 500 元ずつを提供しました。
中央政府は 500 人の通訳集団を玉樹に送るとのことですが、青海 3 大学に呼びかけがあったという話はありません。
学生は 14 日のうちに救援募金を始めましたが、大学は救援のボランティアがジェグに行くのを許しません。玉樹出身の学生は一刻も早く帰りたいでしょうが、道路の混雑と現地到着後の生活を考えると、急いで帰郷することはかえって衣食住の困難を増すことにもなりかねません。いつもならバスでジェグまでは８時間ですが、今 12 時間以上かかるとのことです。（2010・４・１８，0500）

（注：「ブログ「リベラル 21」より了承を得て転載」

****

読後雑感 ： 2010年 第6回

12. APR. 10

中小企業家同友会上海倶楽部代表
東アジアセンター外部研究員（協力会理事） 小島正憲

1.「中国人の世界乗っ取り計画」　2.「続　上海発！　中国的驚愕流儀」
3.「アメリカ、中国、そして日本経済はこうなる」　4.「習近平の正体」

1.「中国人の世界乗っ取り計画」　河添恵子著　産経新聞出版刊　2010年4月16日発行

河添氏の肩書きはノンフィクション作家である。広辞苑によれば、ノンフィクションとは「虚構をまじえず、事実を伝えようとする作品・記録映画」と書いてある。河添氏は冒頭で、世界で活躍している中国人を指して、「中国から“ゴロツキ”が地球へ大量に放出されている。この未曾有の出来事に一体、誰がどんな方法でストップをかけるのか？」（P. 7）と書き、中国人の居住地域を、「中国人自治区はまさに地域、街、国家を破壊しかねない“ガン細胞”といえる」（P. 5）と酷評しているが、この表現はあまりにも下品であり、川添氏が意識的にこの本で中国人を貶めることを狙ったとしか考えられない。それでもこの本で書かれている内容が記録映画のように事実を正確に描いているのならば、その表現も認められるが、残念ながら浅薄で一面的な事実認識が多いので、私はこの本をノンフィクションとして評価することはできない。

①カナダのバンクーバーへの中国人移民について。

まず河添氏は、カナダのバンクーバーへの中国人移民を捉えて、“ゴロツキ論”を展開している。私はバンクーバーには数回足を運んでいるし、まさに河添氏が取り上げている“ガン細胞”の町＝バーナビーの中国人社会の中で少し

の間滞在していたことがある。そのときの体験から、バンクーバーには3種類の中国人がいるのではないかと思っている。その点で河添氏がこの本で、中国人を一括りにしてしまっている乱暴な描写にはかなり違和感を覚える。

あるとき私はバンクーバーのバーナビーの公園で、そこを静かに散策している中国人3世の老人夫婦に会い、この街と中国人の関わり合いの歴史に興味をそそられた。私はそれから急いでバンクーバーと中国人移民について研究した。文春文庫から「チャイナタウンの女」という本が出ており、そこには戦前のバンクーバーでの中国人移民のことが詳しく書かれており、私はそれを涙を流しながら読んだ。この本の紹介が裏表紙に、「広東省出身の出稼ぎ農民の現地妻として女はバンクーバーへ渡った。女は若くて美人、機転が利いて博才もあり、たちまちチャイナタウンの人気者に。男には郷里に妻子がいて、洋館建設という夢もあった。だが第2次世界大戦と共産革命が起こり互いの音信は途絶え…カナダと中国、太平洋を隔てた中国人一家が辿った波乱の軌跡」と書いてある。これを読めば、バンクーバーには戦前に中国から出稼ぎで来て、悲運にもめげず必死に働き、財を成した中国人の末裔が現存していることがよくわかる。河添氏はこの事実についてまったく触れていない。これが第1種の中国人である。

私は1998年にミャンマーで香港華僑といっしょにビジネスをしたことがある。そのとき彼は、香港返還直前にカナダへ移民し、彼の奥さんはバンクーバーに住んでいると話していた。また彼は「私たちはカナダへ移民できて幸せだった。カナダ政府に感謝している」と語ってくれた。おそらくこの時期にかなりの香港華僑つまり実業家がカナダへ投資移民したものと思われる。私が付き合った彼らはかなりの資産家で立派な紳士であり、決して“ゴロツキ”ではなかった。これが第2種の中国人であるが、彼らの生き方についても、河添氏は深く追求していない。

最後が2000年ごろから激増しているという中国大陸からの投資移民である。この中国人たちに対する河添氏の記載についても、細部にわたってはかなり事実の把握不足がある。たとえば移民するにあたっての審査はかなり厳しく、ことに健康診断については厳格である。私はこれらに実際に立ち会ってきたことがあるので、簡単ではないことがよくわかっている。なによりも河添氏はバンクーバーの先住市民たちが、中国人たちを嫌っていると書いている。しかしカナダ政府は中国人移民から大金を投資させ、そのカネで財政を切り盛りし、その恩恵を先住市民が受けており、この政策が先住市民も含めてすべてが納得ずくのものであるという事実を、本文中に明記していない。

②イタリアへの中国人の進出について。

河添氏は、「庇を貸して母屋を取られたイタリア伝統産業」という小見出しを掲げて、フィレンツェやプラートの街が中国人に乗っ取られたと主張し、「中国人は当初、外国人労働力として地元経営の小規模な織物工房に雇われた。裁断やラベルの縫い付けなどの単純労働を長時間、低賃金で働いた。不法就労者で人件費を抑え、中国産の原料を使うことでコストダウンも図れることから、プラートの織物企業は少なからず潤った。…（略）中国人は数年働き技術を習得するとさっさと独立をする。しかも辞めた翌日から、“元ボスの競合相手”となる。この掟破りな異邦人に、プラートの繊維業界はもちろん、役人たちも少なからず狼狽した」と書いている。またこれらの商品を扱う中国人の商店も立ち並ぶようになり、イタリア人商店が駆逐され始めたので、「中国系商店の多くは休日も平日同様に営業しているが、これはイタリア人のライフスタイルと異なる。そのため、各地方政府は中国人商人に『休日を取るように指導する』法律を制定した」という。そして「中国系移民の蛮行とチャイナマネーによって、技術もノウハウもセンスも創造性もないヤクザな中国系企業がイタリアの伝統産業を略奪、強奪し、“絶滅”の危機に追い込んでいる。この事実を、匠の技を財産に、伝統的なモノづくりを大切にしてきた日本が“対岸の火事”と構えていてよいはずがない」と暴言を吐いている。

河添氏は勉強不足である。まずフィレンツェやプラートの繊維産業の伝統はそんなに古くはない。もともとこの地でフランスの下請けを行っていた企業が40年ほど前に、賃金の安さを売り物にして、センスも創造性もないイタリア人が本家から技術やノウハウを盗み独立したものである。さらに言えば日本企業も、その技術をイタリアから学び（盗み）取り、現在に至っているのである。現在でもイタリアでの新作展示会が催されると、日本からたくさんの繊維関係者がその地を訪ね、鵜の目鷹の目で見て回るので、顰蹙を買う場合があるくらいである。したがって中国人だけを悪者にすることはフェアではない。お互い様である。

また私は15年ほど前、フィレンツェで、ある工房を訪れたとき、そこで働いていた若い東洋人の女性から、たどたどしい日本語で話しかけられ、びっくりしたことがある。彼女は中国人で2年前まで日本の縫製工場で研修していたといい、技術をさらにアップし、お金を儲けるためにここで働いていると話してくれた。当時、すでにフィレンツェにそのような中国人女性が結構いるということだった。私はそのとき、日本人もイタリア人も、やがて中国人のこのパワーの前にひれ伏すことになるのだろうと思った。また当時でもそれらの工房では、3K 労働を嫌う若いイタリア人はほとんど働いておらず、設備が大幅に余っており、もし中国人がそこで働いて居なかったら、閉鎖をせざるを得ないような状況であった。とにかくこれまでの中国人はハングリーで、どこでもよく働いた。したがってその努力が、その地の怠け者を駆逐していったのである。このことを“中国系移民の蛮行”というのは、あまりにも暴言に過ぎる。これらの現象は経済法則の帰結である。

③日本のこれからを考える。

河添氏は最後に、「日本のこれからを考える」という小見出しで、短文を書いているが、結論は明確でない。河添氏の論を突き詰めて行くと、日本に残された道はどうも鎖国しかないような気がする。私は鎖国には反対である。しっかり開国して、もし中国人がたくさん入ってきても、日本人が中国人以上に働き、彼らを凌駕すればよいだけの話である。

余計な話だが、私は世界の7か国以上で、自ら工場を稼動させてきた。そしてかの地で現地人たちよりも懸命に働

き、そこから利益を得てきた。ことに中国では“労働模範”と表彰されたほど働き、合計10工場＝約1万人の従業員とともに生きてきた。かつての日本人には、世界を制するほどの勢いがあった。残念ながら現代の若者、ことに男性は内向き志向が強く、世界に出ようとしない。今年、米国のハーバード大学に留学した日本人学生は1人だったそうである。最盛期には1学年に20人ほどいたという。これでは元気のよい中国人に制せられても文句は言えない。

2.「続　上海発！　中国的驚愕流儀」　須藤みか著　講談社＋α文庫刊　2010年3月20日発行

この本には、現代の上海のこまごまとした様子が書き連ねられている。ことに若い女性？の目で見た上海の実情には、独特のものがあり、15年ほど上海に住んでいる私でも知らないことが多く語られている。文庫本なので通勤列車の中で読んでみるのに適していると思う。

まず須藤氏は、万博を間近に控えた上海市政府の「パジャマ外出禁止令」を、話題に取り上げている。さすがに最近では上海市民のパジャマ外出姿を見かけることが少なくなったが、数年前までは夫婦がそろってパジャマ姿でスーパーに買い物に来ている光景などをよく見かけたものである。

また須藤氏はお酒が結構好きなようで、それにまつわる話題も多い。私はアルコール類が一切ダメなので、まさにこの本で私の知らない上海の世界を垣間見せてもらった次第である。ゲイ専門店や酒場経営、焼酎バー、酒席での人脈作り、飲酒運転事情など、それぞれに参考になった。

文中には、須藤氏の友人が犬に噛まれた話もあり、「上海で養狗証を持っている飼い主（つまり飼い犬に狂犬病の予防注射などをしている人）は10万人強。しかし未登録犬はその4～5倍いる」と書き、狂犬病への警告を発している。

上海で須藤氏が妊娠、出産された状況なども書き込まれてあり、老境の男性である私は、読みながら「へェー」と思うことが多かった。ことに上海では、妊娠した女性が臨月間近の自分の裸体の写真を撮っておきたがるようで、「妊婦写真館」が大繁盛しているという。これには私も本当にびっくりした。

3.「アメリカ、中国、そして日本経済はこうなる」　日下公人・三橋貴明著　WAC 刊　2010年4月12日発行

副題　：「それでも、日米中、三角経済の主役は日本だ！」

三橋氏はまず、アメリカ経済の現状について、「破綻前までの世界同時好況は、アメリカ国民が借金を増やしていたから」と述べ、そして「アメリカは証券化商品という形で借金を輸出し」、つじつまを合わせていたという。なぜかここでは、中国や日本が米国債を買い支え借金の肩代わりをしているということには言及していない。続けて「いまのアメリカ経済を支えているのは、公的資金注入の政府支出だけ」なので、それには当然限界が来ると言い、日下氏がそれを受け、「だから2番底、3番底はあるに決まっている」と主張している。

次いで両氏は中国経済の分析を行い、三橋氏が、「いま、中国は政府が54兆円規模でお金を出して、公共事業でもっているという状態です。それは90年代の日本と同じです。この先の展望が見えないですよね。それではどうするのかと言えば、たぶん共産党政府は、いまをしのぐことができれば、いずれアメリカが回復するだろうと思っているのだろうと思います。アメリカがまた借金を増やしてくれるだろう」と結論付けている。

日本経済についての分析を、「日本はいまだに世界一の金持ち国」という見出しを掲げ、三橋氏が「日本の対外資産は全部合計すると約550兆円あります。中国はと言えば、2008年まで277兆円」、だから日本は中国よりはるかに金持ちであると語っている。三橋氏があげるこれらの数字は間違いではないと思うが、私のカンでは、日本の対外資産はモグリのものを含めれば1000兆円を超えるのではないか。また中国の対外資産は、新旧の華僑・華人のものを合計すると天文学的なものになると考える。つまりこのような数字でどちらが金持ちであるかというような検討をしてみても無意味であると思う。その上で三橋氏は、「本当に危ういと思いますね。日本は、資産を持ちすぎているのです。しかも、それを『返さない』と言われたときには、日本には、話し合い以外の解決の方法がないですね。海外に投資されている550兆円のうち、100兆円分が政府の外貨準備です。それは米国債であったり、他の国債だったりします。残りは直接投資が多いんです。日本企業が工場を進出するなどですね」と言い、日下氏が、「国家としては、強い軍隊を持って、対外資産を守るためには軍事力を行使する宣言をしなければ、人は利息も払ってくれないし元金を返してくれない」と主張している。

この議論はきわめて短絡的なおかつ矛盾している。なぜなら両氏が、対外資産550兆円のうち日本政府のものは100兆円だけで、あとは民間企業のものであるにもかかわらず、日本国家が武装してその民間企業を守らねばならないと言っているからである。我々海外進出企業は、個別企業の利益を追い求めて、個別企業の判断で海外に直接投資をしているのであって、始めからそのリスクを覚悟しており、わざわざ日本軍に守ってもらおうなどとは毛頭考えていない。日下氏や三橋氏には、「それはいらぬお節介だ」と言いたい。もし両氏が本気でこんなことを考えているのならば、海外進出企業のすべてに、「貴企業は日本軍に守ってもらいたいか」というアンケートを取って、しっかりその意思を把握してからにしてもらいたい。ただしそのアンケートには日本が武装した場合、その負担のため、法人税がこれだけ高くなるということを明記しておいて欲しい。

日下氏は日本の「国内債権は（世代間の）所得移転にすぎない」言い切り、赤字国債など気にせずに、「規制緩和と法人税の軽減と関税自主権の回復と人事院による公務員の特別扱いをやめることと国会議員の半減と農水省や文

科省の廃止とそれから宗教法人課税と…」を実施せよと主張している。日下氏のこれらの主張には賛成しがたいが、文中には、「“八ッ場ダム”は中止せずに、さっさと完成したほうがいい。そして水を中国に売ればいい」という提言もあった。これは面白いアイディアである。岐阜県も無用の長物と言われている“徳山ダム”を作り続けているが、この面から検討してみるのも面白いのではないか。

両氏は第5章で、「日米中、三角関係の主役は日本」と大見得を切っている。まず三橋氏が、「日米中のこれまでの経済関係を簡単に言うと、いままでは日本が中国に資本財を輸出した。それを耐久消費財にして中国はアメリカに輸出する。それでアメリカが貿易赤字になる。そのかわりアメリカは、米国債を日本と中国に輸出して、そのときに払ったドルを取り返すという構造で成り立っていました」と述べ、金融危機以後、その構造が壊れたので、今後の日米中関係はどうなるのだろうかという問いを日下氏に発している。それに対して日下氏は、「アメリカ、中国のこれからは『日本さまさま』になる」言い切っている。三橋氏が再度、「なぜ中国までが『日本さまさま』になるのがわからないのですが」と問い直すと、日下氏は「実際は日本が怒ったら中国経済は一瞬にして潰れるから」と答えているだけで、それについての詳しい説明は一切ない。これでは三橋氏の質問への回答になっていない。私にも日下氏の言い分はまったく理解不能である。ちまりこの本を読んでも、日米中の今後の情勢の変化はわからないということである。

4.「習近平の正体」　茅沢勤著　小学館刊　2010年4月10日発行

副題　：「2012年秋、『13億人の頂点に立つ男』が誕生する」

この本で茅沢氏は、「第18回党大会では、現在の党ナンバー1である胡錦濤・総書記（国家主席）に代わって、習近平・国家副主席が選出されるのはほぼ間違いないとみられている」と書き出し、習近平氏についての情報を多面的に描きだしている。私は題名から判断して、一種の暴露本かと思いながら読み進めたが、意外に好意的な本だった。

習近平氏は一般に太子党派と呼ばれている。たしかに習近平氏は革命の元勲である習仲勳氏の長男である。しかし習近平氏はその父：習仲勳氏から質素・倹約などを厳しく躾けられたという。また文革時代に、父：習仲勳氏の失脚を間近で見て、「人は変わりやすく、人情など信じられないもの、人間とはなんと薄情なのか」と学び、その上で農村に下放され、厳しい生活を体験している。

しかも幼少のころ、父：習仲勲氏から、「『自分がどのようにして革命に参加したのか、今後、お前たちがどのようにして革命を引き継いでいかなければならないのか、革命とはいったいどのようなものなのか』などを、耳にタコができるほど聞かされた」という。つまり父：習仲勲や同士である劉志丹の陝北革命根拠地時代の話をいつも聞かされていたということである。その劉志丹の死については、いまだに多くの謎に包まれているし、父：習仲勲氏はそれが原因で文化大革命の犠牲になっている。習近平氏が国家主席になればこの問題が明らかにされ、中国革命と中国共産党、なかんずく毛沢東の再評価、そして文化大革命の思想的清算、天安門事件の解明が行われるに違いない。

以下に昨年私が陝北革命根拠を現地踏破調査したときの、劉子丹事件の部分の再録をしておく。全文は同友会上海倶楽部のニュース（第277号：09年6月10日配信）を見ていただきたい。

≪長征：東路軍の悲劇≫　2009年6月

1. 劉志丹の死についての謎

岡本隆三氏は「長征」の中で、劉志丹について次のように語っている。「英雄劉志丹は中国のロビンフッドと呼ばれるような冒険をし、自らの血を流して陝北根拠地を確立した。この根拠地について国民党の閻錫山は“陝北紅軍は武力を用いないで区域を拡大しうる威力を持っている。まず周辺の3方面をひろげて3村、これを波状的にひろげて9村、ついで27村と、その拡大はきわめて早い。赤化した人民は70余万、ゲリラ20万、紅軍は2万をかぞえる”と蒋介石に報告している。その劉志丹が中央紅軍の陝北根拠地到着までのわずかな期間だったが、牢獄につながれ、獄窓から西北の空の星をながめていた。それはまったく、彼の人生にとって、奇妙というよりほかはないほど、ばかげた結末だった。陝北根拠地は長征の灯台の役割を果たしたが、この灯台守であった西北の赤い星－劉志丹は、まるでその役目が終わるのを待ってでもいたかのように、毛沢東が到着して6か月目の1936年4月、陝北軍を率いて黄河を渡り、抗日戦線へ出撃しようとしたとき、これを阻む国民党軍と戦って死んだ」　※筆者が「長征」本文から字句を抜粋し編集。

この岡本氏の「長征」が発行されたのは40年ほど前であるが、その記述は基本的には正しい。しかし現在では劉志丹についての研究が進み、その死について下記のような疑問が出されている。→印でその疑問を列挙。

①なぜ劉志丹は獄につながれたのか。

毛沢東が陝北根拠地の呉起鎮へ着く直前に、中共北方局の幹部が陝北根拠地に来て、劉志丹以下の幹部を右翼投降主義の誤りを犯しているという名目で捕縛し、投獄した。このとき投獄された幹部の中には現在の国家副主席である習近平の父親の習仲勛もいた。劉志丹は十分に戦力を保持していた（精兵5000を率いており、戦力はそのとき派遣された紅25軍の3400を上回っていた）にもかかわらず、反抗せずに獄につながれた。この事件では陝北根拠地で200人以上の幹部が拷問のすえ殺害されたといわれている。その後、劉志丹は毛沢東の指示により釈放された。最近の調査では、1935年5月時点での中共北方局の書記は高文華であり、36年4月から劉少奇に替わっており、この時期の北方局の上部責任者が毛沢東であったことが判明している。なお、毛沢東は呉起鎮に入った（1935

年9月12日）とき、身近にいた幹部たちに、「指揮は正確ではない」と劉志丹を批判したとされている。
→この投獄および釈放はともに毛沢東の指示で行われたのではないか。つまり陝北根拠地を乗っ取るための自作自演ではなかったのか。
②なぜ劉志丹は東へ向かって兵を進めたのか。
　公式文献では劉志丹は毛沢東の「北上抗日」という指示で東へ向かったことになっている。そして黄河を渡り汾河まで進軍したところで、閻錫山軍に阻まれ、陝北根拠地に敗走する結果となった。しかし最近の調査では、このとき毛沢東が劉志丹軍に与えた使命は、モンゴル経由でロシアとの連絡通路を切り開くことであったということが言われている。
→これまで遊撃戦を主張してきた毛沢東がなぜこの時点で無謀にも正規戦に出たのか。劉志丹軍を陝北根拠地から追い出すための作戦ではなかったのか。
→瓦窰堡会議で「抗日民族統一戦線」の方針が決定されたのならば、閻錫山軍と統一戦線を結成し、閻錫山軍を抗日戦争に巻き込むことが基本戦略であり、交戦は避け、粘り強く対話と交渉を続けるべきではなかったのか。
→「北上抗日」という戦略ならば、賀竜や林彪などの中央紅軍を派遣するのが本筋ではないか。
→毛沢東の「モンゴルを通じてソ連とのルートを切り開け」という指示はまさに西路軍と同じで、実現不可能な戦略ではなかったのか。
③劉志丹は誰に撃たれたのか。
　1936年4月14日、劉志丹は山西省柳林県三交の地で撃たれて死亡した。公式には、敵のマシンガンの1発が小高い山の上で敵情視察をしていた劉志丹の左胸を撃ち抜いたとされている。なお遺体については、すぐに瓦窰堡に運ばれたが、なぜか劉志丹夫人には見せなかったという。
→当時の状況から推察して、敵にマシンガンで左胸を撃ち抜かれたという説明は不自然である。警護の兵士に撃たれたのではないか。
④劉志丹とその関係者はなぜ文化大革命で批判されたのか。
　劉志丹の弟の妻は夫の死から20年後に、大量の資料やまだ生存していた当時の関係者から事情を聴取して、「劉志丹」を書いた。それは1962年に「工人日報」などに掲載され、やがて単行本になる予定だった。ところが文化大革命の初期に康生は、この本が毛沢東思想の剽窃であり、習仲勛らの売名行為であると断定し批判した。毛沢東も康生を支持し、「小説を利用して反党行為を犯すとは一大発明である」と強く批判した。その結果、習仲勛や劉志丹の弟の劉景範をはじめとする陝北根拠地の勇士たちは迫害され、その多くが死亡した。長編小説「劉志丹」は毛沢東を批判したものではなかったが、陝北根拠地を築いた劉志丹を輝かしく描いており、毛沢東がその成果をやすやすと享受したようにも読み取れたため、毛沢東が激怒したとされている。志丹県にあった劉志丹の陵墓は紅衛兵によって徹底的に破壊された。現在、この長編小説「劉志丹」は書店にはなく、図書館などで探してしか読むことができない。1990年代になってやっと、白黎が「劉志丹伝」を書き、張俊彪が「劉志丹」を著し、軍事科学院が「劉志丹記念文集」を出版するなど、劉志丹の死の謎に迫る研究が行われはじめた。
→長編小説「劉志丹伝」が劉志丹の死の真相を描き出していたので、毛沢東がそれをもみ消すために文化大革命の批判の対象にしたのではないか。
　このように整理してみると、毛沢東がまことにうまく陝北根拠地を奪取したことがはっきりわかる。陝北根拠地の人民大衆からロビンフッドと慕われていた英雄：劉志丹を、人民大衆の反感を買うことなく上手に排除し、しかも盛大な追悼大会を行うことによって、劉志丹への人民大衆の思慕を毛沢東自身への尊崇の念に変えてしまったのである。見事なまでの演出だと言ってよいであろう。もちろんこれらは憶測にしかすぎないので反論は可能である。けれどもその憶測を否定する材料もない。
　考えてみれば、長征前夜、井岡山で毛沢東は王佐や袁文才を追い出してそこを乗っ取った。この両者は多くの書物では土匪と書かれているが、最近の調査ではともに共産党員だったといわれている。長征とは、毛沢東の根拠地争奪戦であったとも言えるのではないだろうか。劉志丹の死の真相については、習近平副主席が父親の習仲勛から必ず聞いているに違いない。数年先に彼が中国の最高指導者になったとき、歴史の大どんでん返しがあるかもしれない。

以上

****

【中国経済最新統計】（試行版）

上海センターは、協力会会員を始めとする読者の皆様方へのサービスを充実する一環として、激動する中国経済に関する最新の統計情報を毎週お届けすることにしましたが、今後必要に応じて項目や表示方法などを見直す可能性がありますので、当面、試行版として提供し、引用を差し控えるようよろしくお願いいたします。　　編集者より

	①実質GDP増加率(%)	②工業付加価値増加率(%)	③消費財小売総額増加率(%)	④消費者物価指数上昇率(%)	⑤都市固定資産投資増加率(%)	⑥貿易収支(億ドル)	⑦輸出増加率(%)	⑧輸入増加率(%)	⑨外国直接投資件数の増加率(%)	⑩外国直接投資金額増加率(%)	⑪貨幣供給量増加率M2(%)	⑫人民元貸出残高増加率(%)
2005年	**10.4**		**12.9**	**1.8**	**27.2**	**1020**	**28.4**	**17.6**	**0.8**	**▲0.5**	**17.6**	**9.3**
2006年	**11.6**		**13.7**	**1.5**	**24.3**	**1775**	**27.2**	**19.9**	**▲5.7**	**4.5**	**15.7**	**15.7**
2007年	**13.0**	**18.5**	**16.8**	**4.8**	**25.8**	**2618**	**25.7**	**20.8**	**▲8.7**	**18.7**	**16.7**	**16.1**
2008年	**9.0**	**12.9**	**21.6**	**5.9**	**26.1**	**2955**	**17.2**	**18.5**	**▲27.4**	**23.6**	**17.8**	**15.9**
2009年	**8.7**	**11.0**	**15.5**	**1.9**	**31.0**	**1961**	**▲15.9**	**▲11.3**	**▲14.9**	**▲16.9**	**27.6**	**31.7**
2008年												
3月	10.6	17.8	21.5	8.3	27.3	131	30.3	24.9	▲28.1	39.6	16.2	14.8
4月		15.7	22.0	8.5	25.4	164	21.8	26.8	▲16.7	52.7	16.9	14.7
5月		16.0	21.6	7.7	25.4	198	28.2	40.7	▲11.0	38.0	18.0	14.9
6月	10.4	16.0	23.0	7.1	29.5	207	17.2	31.4	▲27.2	14.6	17.3	14.1
7月		14.7	23.3	6.3	29.2	252	26.7	33.7	▲22.2	38.5	16.3	14.6
8月		12.8	23.2	4.9	28.1	289	21.0	23.0	▲39.5	39.7	15.9	14.3
9月	9.9	11.4	23.2	4.6	29.0	294	21.4	21.2	▲40.3	26.0	15.2	14.5
10月		8.2	22.0	4.0	24.4	353	19.0	15.4	▲26.1	▲0.8	15.0	14.6
11月		5.4	20.8	2.4	23.8	402	▲2.2	▲18.0	▲38.3	▲36.5	14.7	13.2
12月	9.0	5.7	19.0	1.2	22.3	390	▲2.8	▲21.3	▲25.8	▲5.7	17.8	15.9
2009年												
1月				1.0		391	▲17.5	▲43.1	▲48.7	▲32.7	18.7	18.6
2月		(3.8)	(15.2)	▲1.6	(26.5)	48	▲25.7	▲24.1	▲13.0	▲15.8	20.5	24.2
3月	6.1	8.3	14.7	▲1.2	30.3	186	▲17.1	▲25.1	▲30.4	▲9.5	25.5	29.8
4月		7.3	14.8	▲1.5	30.5	131	▲22.6	▲23.0	▲33.6	▲20.0	25.9	27.1
5月		8.9	15.2	▲1.4	(32.9)	134	▲22.4	▲25.2	▲32.0	▲17.8	25.7	28.0
6月	7.9	10.7	15.0	▲1.7	35.3	83	▲21.4	▲13.2	▲3.8	▲6.8	28.5	31.9
7月		10.8	15.2	▲1.8	(32.9)	106	▲23.0	▲14.9	▲21.4	▲35.7	28.4	38.6
8月		12.3	15.4	▲1.2	(33.0)	157	▲23.4	▲17.0	▲2.05	7.0	28.5	31.6
9月	8.9	13.9	15.5	▲0.8	(33.4)	129	▲15.2	▲3.5	10.6	18.9	29.3	31.7
10月		16.1	16.2	▲0.5	(33.1)	240	▲13.8	▲6.4	▲6.2	5.7	29.5	31.7
11月		19.2	15.8	0.6	(32.1)	191	▲1.2	26.7	10.0	32.0	29.6	34.8
12月	10.7	18.5	17.5	1.9	(30.5)	184	17.7	55.9	9.7	-44.6	27.6	31.7
2010年												
1月				1.5		142	21.0	85.6	24.7	7.8	26.0	29.3
2月		(20.7)	(17.9)	2.6	(26.6)	76	45.7	44.7	2.5	1.1	25.5	27.2
3月	11.9	18.1	18.0	2.4	26.3	▲72	24.2	66.4	28.1	12.1	22.5	21.8

注：1. ①「実質GDP増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、１月と２月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、(　　)内の数字は１月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥―⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①―⑤は国家統計局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。